

地域おこし協力隊からの定住

元今治市地域おこし協力隊 鍋島 悠弥



1. 地域おこし協力隊を取り巻く現状

総務省によると、地域おこし協力隊（以下、協力隊）とは“人口減少や高齢化等の進行が著しい地方において、地域外の人材を積極的に誘致し、その定住・定着を図ることで、意欲ある都市住民のニーズに応えながら、地域力の維持・強化を図っていくこと”を目的とした取組みである。この制度は平成22年より導入され5年が経過した。隊員数は制度開始年度から増え続け、実施自治体数も年々増加している（図1）。全国各地では隊員の特色を生かした独自の活動が展開されており、メディアに取り上げられることも珍しいことではなくなってきた。また、「地域おこし」や「地域活性化」の成功事例としてピックアップされることも多い。しかしながら、華々しい活躍が取り上げられている一方、協力隊が抱える課題も顕在化してきている。地域や行政とのマッチング、予算の使用用途、地域との関わり方など、協力隊受入地域の数だけ課題があると言っても過言ではない。このような状況のなか、平成26年12月に明らかとなった地方創生に関する政府の総合戦略原案に、協力隊の隊員数

（平成25年度978人）を2020年までに4000人に拡大することが明示された。協力隊制度は、今まさに過渡期にある。これからの協力隊について、自身の経験を基に論じようと思う。

2. 地域おこし協力隊としての3年間

2-1. 活動地域である今治市の概要

愛媛県今治市は、平成17年1月に12市町村が合併し、人口16.6万人、陸地部と島しょ部といった多様な地勢を持つ人口県下第2の市である。島しょ部の6地区（吉海、宮窪、伯方、上浦、大三島、関前）は、瀬戸内しまなみ海道（平成12年5月に開通の有料高速道路）と航路によって繋がっており、1つの生活圏となっている。これにより利便性が確保されている反面、ストロー現象の発生により都市部への若者の流出、いわゆる「担い手世代」の喪失が顕著となっており、人口減少、高齢化が大きな問題となっている。このような状況の中、平成24年4月より島しょ部の6地区に12名の協力隊が導入され、私は島しょ部のなかでも最北端に位置する大三島の上浦町に配属された。

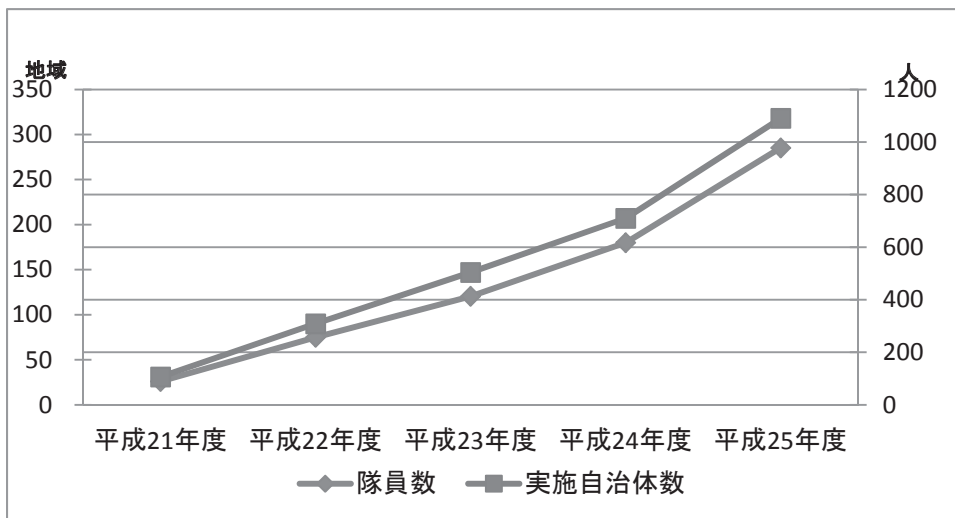


図1 地域おこし協力隊と実施自治体数の推移

2-2. 繋がりをつくることに徹した1年目

今治市が協力隊を導入した大きな目的は最終的な隊員の「定住」であり、日々の活動への具体的なミッション等は明示されていなかった。また、隊員は市の嘱託職員であるという立場もあり、活動当初はかなりの戸惑いがあったことを覚えている。何をすればい

いのか、どう動けばいいのかもわからない。漠然とした目標はあるが、動こうにも人間関係は完全にゼロからのスタートである。地域の人たちも、ただの移住者とは言い難い自身をどう扱えばいいのかわかっていた。しかし、何もしないわけにもいかない。まずは何であれ、顔を覚えてもらうことが大切であると割り切り、いろんな事、いろんな現場に顔を突っ込んだ。飲もうと言われたら絶対飲み、おいでと言われたら絶対に行くということを継続した。これは、3年間の活動の中でも常に基盤に置いていたことでもある。人間関係の構築に近道はない。特に地域という場所においてそれは顕著であると思う。

2-3. 活動の展開と定住への意識

2年目に入ると、1年間の活動が功を奏してか、爆発的に繋がりが増え始めた。嬉しい事でもあると同時に、残酷な現実も突きつけられる。繋がりが増えれば増えるほど、色んなことを覚えて教えてもらうほど、地域のことをなにも知らない自分に気づいてしまった。地域行事や農業、イベント作業に酒の席、どんな現場に居ようとも、私にとって地域の人は「憧れの存在」であり「かっこいい人たち」であった。地域という隔絶された場所とめまぐるしく変化する自然や文化の中で、誇りを失わず地域に生きてきた人たち。いつしか、自分も「かっこいい人」になりたい、と思うようになった。この場所で1人の人間として認めてもらわなければ、この場所に来た意味がない。そんな思いを抱いていた活動2年目の年に、集落の祭においてよそ者としては初めての獅子役をやらせてもらった(写真1)。祭が終わった後、とある人に「これでお前も集落の人間になったな」と声をかけてもらい、心底感動したことを鮮明に覚えている。思えばこのときこそが、定住を決意した瞬間であったのかもしれない。定住するとなれば生きていく術、つまり自分で金を生み出す仕事を考えなければならない。これまでのようにがむしゃらになんでもやっているだけでは駄目だと思ひ、1年目からの活動を基盤に置きながらも独自の活動を展開していくことにした。自分のやりたいこと、そして地域と言う環境を生かせる仕事という2つを組み合わせる結果、手始めに自費で自然体験活動リーダーの研修を受けた。この研修がきっかけとなり、自分の中で漠然としていた考えがまとまり始め、島ならではの「体験



写真1 獅子頭と共に



写真2 体験活動の様子

活動」を実施するに至った。都市と地域の繋がり、若者の気づき、子どもたちの笑顔を生み出すことを目的に、特産品でもある柑橘の農業体験を始めとした様々な体験活動を実施した(写真2)。体験活動の実施そのものは、経験不足を感じる場所もあったが概ね成功といえる満足のいく結果であった。しかしながら、体験活動だけでは到底食べていけるほどの金を稼ぐ事はできないとも感じていた。また、体験活動よりももっと地域と一緒にできることがあるのではないかと考えていた。自分の仕事を通して、もっと何か島の助けになるようなことがあるのではないかと考えていた。そんなことを考えながら悶々として2年目の活動が終わりを迎えようとしていた時に、しまなみグリーン・ツーリズム推進協議会が私に声をかけてくれた。グリーン・ツーリズム推進協議会は県が事務局

を持っているが、団体としての独立を目指していた。そして、事務局を担うことができる若い人材を探していたのである。実は、グリーン・ツーリズムは、私の大学院での専攻分野のひとつであり、地域おこし協力隊に募集した際も「この知識を生かすことができれば」と漠然とした思いも持っていた。しかも、グリーン・ツーリズムは自身が培ってきた体験活動の経験も生かすことができる。都会と地域の交流の場とするための農家民宿を開業したいと考えてもいた。活動の最終3年目を迎える直前に、全てが繋がった。

2-4. 焦点を定めた活動と任期の終わり

3年目からは、グリーン・ツーリズムについての見識を深めようと思い、積極的に研修に参加した。「定住のためのグリーン・ツーリズム」を前面に押し出した結果、市も私の研修参加等は積極的に応援してくれたのである。資格の取得に関してはグリーン・ツーリズム推進協議会も積極的に参加を促してくれたため、市と県の両方から応援されるかたちでグリーン・ツーリズムにおける経験値を積む事ができた。また、1年目より継続していた行政関連のイベントにも体験活動やグリーン・ツーリズムの要素を織り交ぜながら参加し、積極的に推進活動を行った。この頃になると、活動を通して繋がりをもった人々が私を頼って活動地域を訪れるようになり、地域内においても落ち着いた繋がりができるようになってきた。3年目を迎え、やっと地に足のついた感覚をもつことができたのである。

3年目を振り返ると、活動の振れ幅は大きく、一貫性

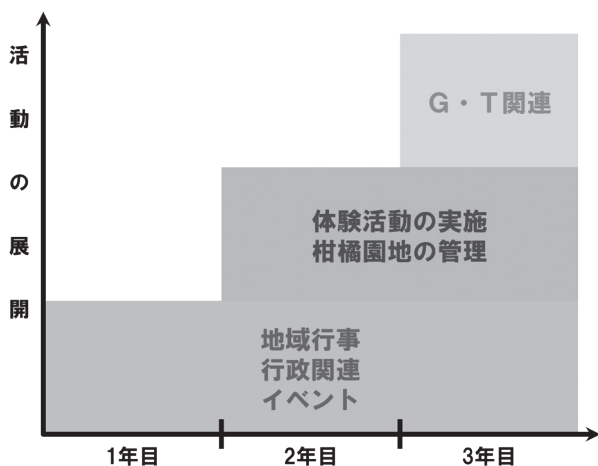


図2 3年間の活動の展開

のないことを積重ねてきたように思う。しかしながらそれ故に広い繋がりを持つことも可能であったし、結果的には段階的に活動を積み重ねることができていたのは、運がよかったと言えるのかもしれない(図2)。

3. 地域おこし協力隊と受入地域

3-1. 地域に入るということ

協力隊は、地域からすれば「移住者」であり「よそ者」であり「異質な存在」である。これは、協力隊が常に意識しなければならないことであるように思う。地域は、独自の自然と文化を歴史に刻みながら現在まで脈々と続いてきた強固な存在である。変化し続けてきたであろう自然や文化の中で、それでも地域は誇りを失わずに現在まで存在してきた。ここには、よそ者には知りえない苦勞もあつたであろうし、逆に大きな喜びもあつたはずである。そんな積み重ねと蓄積の上に細々と存在する地域に、いつも私は尊敬の念を抱かずにはいられない。協力隊にとって必要なのは「地域に入って何をするのか」という以前に「地域に入る努力ができるのかどうか」という点にあると思う。地域に入る、ということはそれなりにリスクを伴うことではあるし、しがらみや独自の雰囲気にもまれてしまうこともある。しかし、そういったことを知ることは失敗でもなんでもないし、むしろ協力隊が活動を展開していくにあたり一番大切な基盤をつくる作業である。先にも書いたように、地域において人間関係を構築することに近道はない。人と人の付き合いである以上は怖気づくこともあるし、疲れてしまうこともあるかもしれないが、この基盤づくりを継続していけばある日突に活動が認められたり、自分の道が広がる瞬間がくる。個人の能力や年齢的な要素も協力隊にとって必要なことではあるかもしれないが、謙虚で熱い気持ちを持って、またそれを継続させながら地域で過ごすことが、最も重要なことである。私自身は、この思いを持ち続けたことが功を奏してか、結果的に地域に残るといった選択肢を選ぶことができた。これは運の良さも働いたかもしれないが、運を掴むための努力、すなわち「地域に入らせてもらう」という意識のもとに活動を継続した結果でもあると感じている。

3-2. 擦れ違いを生まないために

最近の協力隊の動向を見ていると、行政との関係作りや、地域とのマッチングの良し悪しについて多く取り上げられている。これは何も受入地域や協力隊のどちらか一方が全て悪いわけではなく、相互の微妙な認識の違いが生み出す結果であろう。協力隊受入地域やこれから導入を考える自治体をお願いしたいことは、こうした擦れ違いを生まないためにも、協力隊に明確な着地点を用意してあげて欲しいということである。ここで言う着地点とは「定住」であったり「具体的なミッション」であり、これは受入地域が協力隊を導入する目的と同義である。すなわち、地域がどのような未来を描き、目指し、どのような道筋を歩もうとするのかを明確にすれば、自ずと協力隊を導入する目的が見えてくるはずである。協力隊はあくまでも「地域に協力」する立場にあり、入ってくれたらどうにかなる、人口が増えたからそれでよい、という考えだけでは地域にも協力隊にも不幸な結末しか待っていない。しかしながら、時には地域も協力隊も方向性を修正する必要性に迫られることもあるため、活動におけるある程度の振れ幅はあるものだと事前に認識しておく必要がある。協力隊は謙虚な姿勢をもって地域に入ることが必要であると言ったが、地域もまたそれを受け入れ、日常から密にコミュニケーションを図ることで、協働して地域づくりに臨むことが可能となるのではないだろうか。

5. これからの地域のために

協力隊に採用された平成24年6月に、滋賀県にて地域おこし協力隊初任者研修会が開催され、私も参加した。その際に、当時の総務省地域力創造グループ人材活性化・連携交流室長であった澤田史朗氏が言った「物性は1 ppmで変わる」という言葉が今でも心の中にある。「地域と言う場所に協力隊というたった一滴の存在が入ることで、化学反応が起こり、地域は変化する。地域が変われば日本が変わり、課題先進国から課題解決先進国へと歩き出すことができる」と澤田氏は熱く語ってくれた。協力隊が起こす変化、それは微々たるものであるかもしれないし、地域からすれば大きすぎる変化であるかもしれない。そもそも地域が変化することが正しいことであるのかどうかも、私には結論は出せない。ただ、現在地

方創生が叫ばれ、地域が何を望みどんな選択をするのか、変化を強いられる段階に来ていることは間違いないと言える。その中で協力隊はどのような役割を果たすのだろうか。これは私見であるが、地域には人々の血と汗が培ってきた産業や歴史や文化が優しく灯っている。今にも消えてしまいそうな暖かく深い火がたくさんある。その火を、地域の人たちと一緒に守り、増やし、新しい火を灯していくことが、変化の前段階にある地域のなかで協力隊が果たすことのできる役割ではないだろうか。そして、その火を全国の仲間と共に繋ぎ、日本を明るく灯すことができるのではないだろうか。協力隊は、これからの地域のために存在し、日本を担っていく存在でなければならないと思う。優しく、熱く、地域と共に歩むことができる協力隊が増えていくことを願いたい。

Profile 鍋島 悠弥 (なべしま ゆうや)

元今治市上浦町地域おこし協力隊
 2010年3月 近畿大学農学部卒業
 2012年3月 近畿大学大学院農学研究科修了
 2012年4月～2015年3月 今治市上浦町地域おこし協力隊として活動